



第 3 章

現状の課題

1

仙川全体の課題

(1) 河川維持水の減少

河川維持水を送水している境浄水場は、ろ過システムの改修計画を策定中であり、ろ過システムの変更内容によっては導入量が大幅に減少する可能性があります。

現状でも水深が4～5cmの日が多く、水生生物にとって非常に厳しい環境になっています。

メダカの生息環境として望ましい水深は10cm以上といわれており、良好な水辺環境を維持していくためには、少なくとも現状の水量以上の河川維持水が必要となるため、今ある水量を最大限に有効活用する整備などの検討が必要です。



水が枯れた状態

2

整備済み区間の課題

(1) 河川施設の老朽化

仙川の親水化整備に着工してから約20年が経過したことから、川底や木杭などの河川施設の老朽化が進行しています。限られた河川維持水を有効活用するためには、老朽化した施設への対応や水を維持できる構造へ改修するなどの検討が必要です。

(2) 市民に親しまれる水辺環境の維持管理

今ある仙川の水辺環境は、20年近くの歳月をかけて育まれたものであり、今後も地域の環境資産として残していく必要があります。そのためには河川維持水の減少に対応した水辺環境を良好に維持していく管理手法の検討が必要です。

3

未整備区間の課題

(1) 不足する河川維持水

河川維持水が不足している現状では、上流側の整備済み区間において護岸への

しみ込みや蒸発、植物による蒸散吸収などで水が減少し、未整備区間まで水が到達していません。

仙川の親水化整備は「流れを復活」することを目的としており、未整備区間に水を流しつつ水深10cmを確保するためには、シミュレーションを行った結果、約800m³/日以上 of 河川維持水を確保する必要があります。

(2) 適正な流下量の確保が困難

親水ゾーンをはじめとする未整備区間では、河川に求められる流下量を確保するための河川断面の規模が確保されていません。また、河川断面の確保には複数の橋の改修も必要となります。特に都道123号線との交差点の橋は、東京都管理であるため都との連携が不可欠です。

橋の改修がされないまま河川の整備だけを行った場合、橋の部分での河川断面不足により橋上流部の水位が上がり、部分的に洪水の危険が高まることから、治水上の効果も低いものとなります。そのため、橋のかけ替え工事が完了してから河川整備工事を行う必要があります。

(3) 限られる護岸構造

河川に求められる流下量を確保するためには、橋だけでなく護岸構造の検討も必要です。仙川リメイクでは石積み護岸が提案されていますが、未整備区間は河川区域の幅が狭いことから、緩傾斜護岸や石積み護岸のスペース確保ができないため垂直な護岸となります。

また緑化の観点からも、仙川沿いに高木の植栽は困難です。

(4) 住宅間近での工事

未整備区間では住宅が河川に近接しています。既存の護岸構造物を撤去すると、住宅に傾きなどの影響が出る可能性が高いため、工法を慎重に選択する必要があります。また、工事車両が河川に接することができる箇所は橋か公園に限られるので、重機の進入や資材の搬入、工事ヤードの確保が困難な状況です。

(5) 高額な工事費

工事条件が厳しい中で特殊な工法で施工を行えたとしても、石積み護岸の工事費に比べて約3倍以上の金額となることに加え、多額の仮設費用が必要となります。川の道ゾーン(地中埋設部)を除いても未整備区間は2km以上あるため、整備費の増大が懸念されます。

